小学校外国語活動における動詞フレーズの役割
～高学年児童の認知プロセスに着目して～

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程

奈良市教育委員会　　柏木賀津子

動詞フレーズ　　アニメーション教材　　『英語ノート』分析

1.　これまでの自己の研究と、現在の取り組み

インプットの殆どを英語で行う場合の小学校英語活動において、現在まで以下の４点について研究してきた。

（1）　学習者間の英語の音声の模倣によるインタラクションは、子どもの単語の意味理解に効果をもたらすことを確かめた（柏木, 2006）。

（2）　英語活動での発話は、まだ生産的なものではなく、（1）のインタラクションとは、子どもがインプットを「聞く力」と、「模倣する力」に支えられる。そこで、8 歳（2 年生）と 10 歳（4 年生）の文中における単語の意味推測について、この２側面の相関関係を比較した。８歳は、２側面に強い正の相関関係があるが（*r*s=0.72）１０歳は２側面に相関関係がなかった(*r*s=0.38)。つまり、８歳は耳から聞いた英語を抵抗なく模倣する傾向があるが、１０歳はリスニング力が高くても模倣することに抵抗を示す子どもが多かった。この研究から、１０歳頃の子どもは耳から聞いた英語のインプットをそのまま受け入れるのではなく、認知的な方法によって意味の推測や分析をしているのではないかという仮説を得た（柏木, 2006）。

（3）　英語活動で、使われる単語についての品詞分類をしてみると、名詞のインプットに偏りがちで動詞は比較的少ない（柏木, 2007）。しかし、母語の習得過程をみると、「子どもの動詞の獲得は最初の文法構築である。」（Tomasello,1994）と言われ、『動詞の島仮説（The Verb Island Hypothesis）』(Tomasello,2003)に基づく動詞導入は、第二言語学習においても言語の習得への大切な鍵を握ると考えられる。

（4）　小学校英語活動の動詞導入として動詞の Schema Formation (Tomasello,2003)を具体化し、Flash 動詞アニメーション教材を作成した。次に、動詞の Schema Formation に気づく機会を与える授業と、そのような意図はないが TPR 等で動詞フレーズを用いる授業を 6 年生で実施した。“need an umbrella”, “break the window” 等が文脈に含まれた。事後

の記述とリスニングから、前者の理解度が高く、また、動詞によっても、子ども個々によっても、理解度に有意な差がみられた(柏木,2007ｂ)。

写真１．授業で使ったことがある動詞フレーズのアニメーションを帰納的に導入

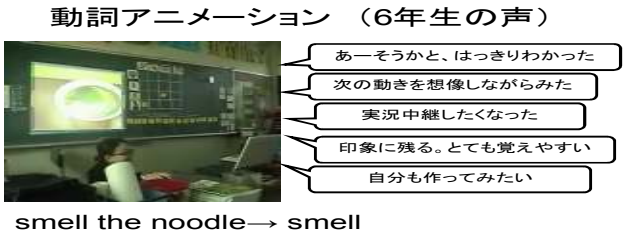


図１．The Verb Island Hypothesis

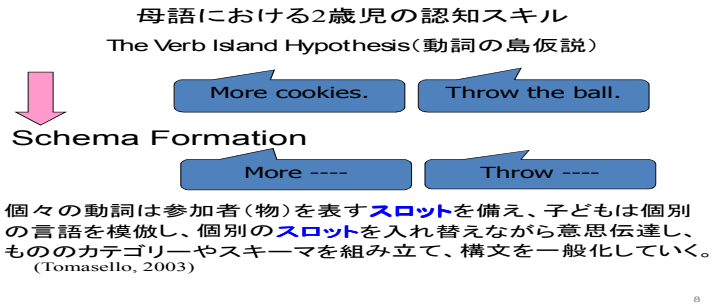
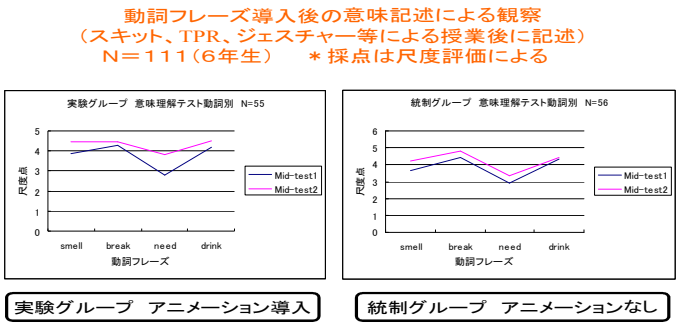


表１．動詞フレーズ別の高学年の動詞の意味理解



以上の４点を、動詞研究の基盤として、現在次のような研究に取り組んでいるが、本発表では主に次の（1）、（2）、（4）について分析データと授業および、奈良市教員研修の映像等を用いて発表したい。

（1）　６年生のデータ(柏木, 2007b)から、実験における子どもの動詞フレーズの意味理解のプロセスを、事例研究によって質的に研究する。

（2）　「英語ノート」試作版（文部科学省, 2008）で、予想される教室のインプット語彙から Teacher Talk を含めた分析を行い、動詞を含む'word combination' を抽出し、言語コーパス BNC 等との比較を行う。特に、本研究で注目する動詞は、知覚動詞（see, smell）や獲得動詞（take, get, want）等の目的語を伴う動詞であり、コーパスでは使用頻度の極めて高い動詞である。『英語ノート』では、それを活用する指導者の Teacher Talk がどの程度実現できるかに、指導の成否がかかっている。子どもは、小学校外国語活動で、どのような「頻度」や「手続き」で動詞を含む 'word combination' に触れることになるのか考察する。

（3）　母語の動詞習得に関する先行研究と、教育方法としての Focus on Form に関する先行研究から、小学校外国語活動に応用できる点を整理する。

（4）　コーパス等から、小学校外国語活動で積極的に触れさせたい動詞を Basic Verbs 50 として絞り、先行研究から得た知見を Flash アニメーション教材にする。

２．本研究と小学校外国語活動の関連性や特色

ゲームやタスクなどによる意味中心（focus on meaning）の英語活動は意味のある活動であり、子どもは無意識のうちに第二言語に浸ることができるが、インプットの'type'はランダムで、言語のパターンに気づく足がかりは少ない。このことで、高学年児童が「よくわからない。」という印象を持つ様子も観察される。

高学年児童は、音によるコミュニケーション活動の中で、繰り返し現れる形態素（morpheme）、単語（word）、単語の結合（word combination）などに、何らかの「気づき」（Shmidt,1990）があるのではないだろうか。また、高学年では母語の力による推測から言葉のスロットを捉えることも可能であろう。しかし、指導者にこの点に関する考えや意図がなければ「気づき」や「推測」のある学習は少なくなる。そこで、次のように研究の仮説を立て、学習者の注意を言語的な特徴（動詞フレーズ＝動詞を含む 'word combination'）に向けさせる様な指導の工夫を図りたい。

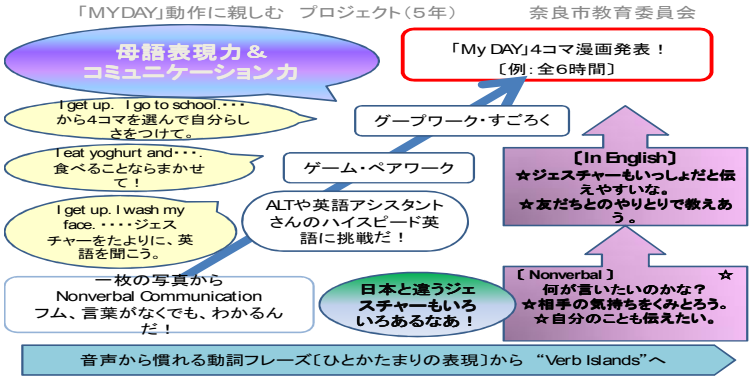
［研究の仮説］

子どもは様々な表現のタイプ（type frequency）に触れて、word combination（ex.eat a cookie, eating cookies.eat an apple 等）を関連づけて「動詞の島」を作ることができる。またそれらの動詞の島から、動詞の Schema Formation（ex. eat＋X）に気づき、それらを応用してもっと英語の表現を創る。

筆者は、奈良市教育委員会ハローイングリッシュ事業（英語アシスタントとして現在８０名のネィティブスピーカーや英語に堪能な外国人、日本人の地域人材協力を得て英語活動を推進）を担当している。授業で言葉を使い、試してみる場

面を創り、子どもが自ら言葉の機能やおもしろさに気づいて学ぶには、担任と英語アシスタントの協働による「仕込み」が必要である。「子どもが意味を推測する手がかり（Scaffolding）」、「インプットに頻繁さやねらいを入れ（Input enhancement）、表現を創り出したくなるための気づき」があることは、「授業が分かる、楽しい。」ことに繋がる。動詞研究から、高学年の子どもの認知プロセスを考え、動詞フレーズがコミュニケーション力の素地作りに担う役割を、『英語ノート』の活用に関連させて提案する。

図.2　『英語ノート』　～自分の一日を紹介しよう～　（奈良市研修例）



（主な参考文献）

Harley, B. (1998) . The role of focus-on-form tasks in promoting child L2 acquisition. In Doughty and Williams (eds.), *Focus on form in classroom second language acquisition,* Cambridge University Press, 156-174

柏木賀津子.(2007a). 小学校における英語語彙学習のためのアニメーション教材の開発：動詞のスキーマフォーメーションに着目して. 日本児童英語教育学会 JASTEC,26.

柏木賀津子.(2007b). 小学校英語教育における動詞の役割と子供の Schema Formation -子供の認知プロセスに着目したアニメーション教材の開発を通して- *STEP BULLETIN,*19

Shmidt,R.(1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics,* 11(2), 129-158

Tomasello,M.(1994). *First Verbs: A Case Study of Early Grammatical Development*, Atlanta: Emory University.

山本麻子.(2005)『子どもの英語学習-習得過程のプロトタイプ-』 東京：風間書房

Wong,W. (2005). *Input Enhancement: From Theory and Research to the Classroom*, New York: McGraw-Hill.